

## 献 辞

高田卓爾先生は、一九八八年三月三十一日づけをもって御退職なさいました。赴任当初の御予定では、一九八九年三月まで本学で御活躍いただくはずでしたが、摂南大学法学部の創設責任者としてのお務めに専念されるため、一年早く退職されたわけです。先生の御退職を惜しみ、本号を先生に捧げる御退職記念号といたしました。われわれ法学部教員一同の心からの感謝と惜別の情をおくみとりいただければ幸いです。

高田先生は、東京帝国大学法学部法律学科を御卒業ののち、大阪市立大学教授、さらに大阪大学教授をへられ、一九八四年四月に本学教授に着任され、四カ年にわたり法学部のために御尽力いただきました。人事面についていいますと、これまでの豊富な御経験から、基礎法の充実、わけても法制史の必要性をお教えいただきました。先生の御退職後にはなりましたが、本年四月より優秀なる若手研究者をわがスタッフに加えることができました。さらに教育面では、学部および大学院において刑事法を御担当いただきました。とくに大学院では、司法試験考查委員としての経験をお持ちの先生から、直接お教えを受けることができたことが、司法試験受験学生にとり、ことのほか刺激となつたと聞いております。先生に植えていただいた種と苗が花咲き、いつかその成果を先生に御報告できるものと期待しております。

学問面のことは、門外漢の私が講釈することは不適任でありましょう。先生の御略歴等を拝見しておりまして、驚きを新たにしました点がございます。私は先生の講義を直接受講する機会はありませんでしたが、かの御高著『刑事訴訟法』を学生のおり愛読させていただいた一人です。私が基本書とした書物は、改訂版（第七刷、昭和四十年四月発

行)でございますが、同書の奥付によりますと、初版は昭和三二年十月発行とあります。指折り数えてみますと、先生はこの七百頁に迫る大著を、弱冠三七歳のお年で出版されていることになります。「驚嘆する」とはまさにこのようなことをいうのでしょうか。

先生が今後ともますます御健勝に過ごされますことを、また、先生の貴重なる御経験と学問成果を、後に続くわれわれに、これまでと同様にお示しいただけますことを、お願いし、かつお祈りいたしております。

一九八九年十月

法学部長 松倉 耕作